

農業を「普通の仕事」にしたい

松橋 拓郎 (平成17卒)

大学時代に教師から農業に方向転換

私は大潟村に農家の長男として生まれました。平成19年のわか杉国体で大潟村がボート競技の会場に決まっていたため、秋田高校ではボート部に所属し、教師を目指して早稲田大学の教育学部に進学してからもボートを続け、国体出場を果たしました。教員免許を取得したものの在学中から農業に興味を持ち、方向転換して実家に戻り農家になりました。就農以来、農業を通してコミュニティを形成することや農業を自分ごとにしてもらい関わる人たちに喜んでもらうことを目指して活動を続けています。中でも力を入れているのは酒米が種から日本酒になるまでの過程に関わりながら皆でつながり、「自分たちの日本酒」をつくりあげる「農家とつくる日本酒プロジェクト」です。現在約300人のメンバーとプロジェクトを運営しています。

職業としての農業の魅力を高めたい

農家の数はすごいスピードで減り続けています。農業に興味を持ち始めた学生時代から農業に関する統計データを見ていますが、実際に農家になってからは、なぜ農家は減り続けるのかと考え続けています。栽培の効率化が進み同じ面積に対して必要な農家の人数が少なくてよくなったという面もあるでしょうが、一般的には農業はもうからないから農家が減り続けると言われます。しかし、私はそもそも職業としての農業の魅力が高くないのではないかと考えています。

当たり前のことですが、減るということは、退出するプレーヤーの数に対して参入するプレーヤーの数が少ないということです。農業に参入するにはいくつかの方法があると思いますが、本来一番ハードルが低いはずなのが親元就農です。生活が成り立つほどの所得が得られることが前提にはなりますが、設備も農地もノウハウも売り先も(ついでに実家も)あります。ものすごく簡単に言うと農家の子供がみんな実家の農業を継げば農家の数はそんなに減らないということです。しかし、ハードルが低い「はず」と書いたのには理由があります。周りの農家の同世代や先輩たちの話を聞くと(もちろん一例ではありますが)、小遣い制で月数万円の可処分所得を親に渡される、仕事の評価ではなく結婚や出産などのライフステージの変化が小遣い増額のきっかけになる、親の都合や気分で作事の予定が決まるなどといったことをよく聞きます。また、農業というか家族経営全般に言えることかもしれませんが、そもそも家族間で仕事をしながら円滑にコミュニケーションを取ることも意外と容易ではありません。私自身の経験も一部重なる部分がありますが、このような状況で尊厳を感じながらやりがいを持って働くことができるだろうかという思いが強まっています。

その他には独立して新規で就農するという選択肢もありますが、高額な設備投資と農地の確保、技術の習得が必要で、さらに外部から農村社会に入って行かなければな



まつはし・たくろう/1986年、大潟村に農家の長男として生まれるも、教師を目指して高校卒業後は教育学部に進学。在学中に農業に目覚め、ヨーロッパの農村への滞在や北海道での農業研修を経て2011年に故郷である大潟村へ戻り就農した。農業を通じたコミュニティづくりを目指し、皆で「自分たちの日本酒」づくりを目指す「農家とつくる日本酒プロジェクト」などに取り組んできた。2023年、父からの事業承継を機に(株)大潟村松橋ファームを設立し代表取締役役に就任。

りません。独立就農とはすなわち起業です。農業に限らず全産業でみても事業を継続し続けられる起業家は実力と運を兼ね備えた一握りの人たちと言えるでしょう。

これ以外では農業の経営体(主に法人)に就職するという選択肢もあります。農地の集約が進み、従業員を雇用している法人が増えてきた印象です。

普通に休みが取れ給料をもらえる会社に

2023年に父より事業承継を受けるタイミングで(株)大潟村松橋ファームを設立しました。普通に働いて普通に休みがあり、普通に家族や仲間たちとの時間を持つことができ、普通に給料をもらえるような会社を目指しています。

法人の方が法定福利費や税務関係の外注費用もかかりますし、自動車保険一つとっても法人の方が保険料が高いです。しかし、法人として就業規則や社内環境を整えていくことにしました。

法人設立という箱を作る作業は拍子抜けするくらいに簡単でしたが、この箱を魅力的な経営体にすることを目指しています。

家族だけではどうしても甘えや非常識な部分などを排除しきれないので「他人の目」を入れるべく、家族以外の人を正社員として招き入れるのを次のステップと定めています。当然のことながら、個人事業を法人経営に移行して就業規則を整えるだけで魅力的な経営体になるわけではありません。新米経営者として試行錯誤の毎日です。

経営理念は、「農業を通して価値を提供する」です。舌から得られる情報のみならず脳から得られる情報も駆使しておいしいと喜んでもらう。魅力的な経営体をつくり良質な雇用を生み出し、共に働く人や地域に貢献する。このように組織の外に対しても中に対しても農業を通して価値を提供することを目指しています。

こんな当たり前のようなことを真顔で話していて時々恥ずかしくなることがありますが、ちょっと特殊だと思われがちな農業を「普通の仕事」にするのが私の目標です。